

野球と武士道を通して見る日本人のスポーツ観 The sport view of the Japanese who sees through baseball and Bushido

1K09B191 丸岡 龍介

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 木村和彦 先生

【第1章・序論】

近年、日本人アスリートが世界の舞台で目覚ましい活躍を遂げているが、海外メディアはそうした日本人選手を「武士」や「侍」と表現する。ただ単語として使いやすいという理由だけで用いられているわけではなく、日本人選手の性質が、他国の選手に比べ異彩を放っているために使用されていると考えた。そこで、日本人選手の、さらには日本人の性質を調べ、それがどのようにスポーツ観に影響しているのか明らかにすることを本研究で試みた。研究方法は、野球に焦点を当てて日本人のスポーツ観を考察した。日本人を理解する材料として「武士道」を用いて、「野球」と「武士道」に関する文献、先行研究を収集し、分析、考察を行った。

【第2章・野球の歴史】

ベースボールは1840年代にアメリカで生まれたスポーツである。イギリスの遊びであったラウンダースというゲームに、アレクサンダー・カートライトがルールを付け加えてスポーツへと昇華させた。初期の頃はマンハッタンにおいて上流階級の人々の間で人気を得ていたが、その熱がブルックリンに伝わると、労働者階級の人々によって、品性よりも金が重視されるスポーツと変化した。ベースボールは日本にも伝わった。1872年、第一大学区大一番中学（一高）においてホーレス・ウィルソンが学生にノックを始めたのが始まりとされている。一高で、学生 の精神修養として用いられたベースボールは野球と名付けられ、1896年に横浜アスレチック・クラブとの初めての国際試合で勝利すると、全国の学生の憧れとなり、品性が何よりも重視されるスポーツとして発展していった。

【第3章・武士道】

武士道は不文律であるため、その時代背景に合わせて変容していった歴史がある。鎌倉時代の武士は主君との間に経済的な契約を交わしていたが、そこ

に「情」という非論理的な感情が加わり、命を賭して主君に仕える形が義理とされた。しかし時代が戦国になると、武士道にも実力主義が反映され、思想的なものから処世訓となった。江戸時代になると世が安定し、戦という主戦場を失った武士は自らの存在意義の保持のため、武士道に儒教を取り入れ人間としての格を高めることに注力した。明治になり、階級の廃止とともに武士道も一時姿を消した。しかし、長い年月をかけ醸成されてきた武士道は日本人の深くに根差しており、消滅することはなかった。不文律だった武士道が最初にまとめ上げられた著書が新渡戸稲造の「武士道」である。そこで述べられている「義・勇・仁・礼・誠・忠義・名誉」の徳を用いて次章で考察を行う。

【第4章・考察】

野球は、学生に精神修養を行うものとして扱われたため、ベースボールのような賭博や不正に満ちたスポーツとは相反する品格の高いスポーツとして定着した。また、対戦の構図が魅力的であり、投手と野手が一対一で交戦する様式が、武士の戦いを彷彿とさせ、日本人に潜在している武士道を刺激した。日本のメディアはその刺激を巧みに伝え、野球を国民的スポーツにまで発展させた。現代に至っては多種多様なスポーツが親しまれており、その中でもサッカーは野球を抜き日本一の人気スポーツになった。特に日本代表が支持をあつめており、ワールドカップは国民が熱狂する行事となった。そこまで人気となった要因は武士道にある。日本代表選手は世界一になることを目標とし、日々激しい鍛錬を積み、強豪相手に臆することなく向かっていく。その姿勢はまさに武士の様相であり、嘗てアメリカを相手にした野球とも重なる。日本人は世界の舞台で選手が武士道精神を持って戦う姿を見たとき、日本人としての美德を誇りに思うのである。